

# 1855年安政江戸地震火災の彩色写生画について

公益財団法人 地震予知総合研究振興会\* 松浦 律子

株式会社 防災情報サービス† 中村 操

On the colored sketches of the fire after the 1855 Ansei-Edo Earthquake

Ritsuko S. MATSUURA

Association for the Development of Earthquake Prediction

Chiyoda Build. 1-5-18 Sarugaku-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 101-0064 Japan

Misao NAKAMURA

Information Service for Disaster Prevention, Miroku-cho 230-7, Sakura,  
Chiba, 285-0038 Japan

Keywords: Historical Earthquake, Ansei-Edo Earthquake, Fire, Seismic Intensity

There are two versions of colored sketches of the fire caused by the 1855 Ansei-Edo Earthquake. One is the version owned by the Tokyo Metropolitan Library. In the course of our detailed examination of the fire points in the other paper, we returned these drawings to their original state before they were bound to a book, one sheet at a time. This made the position of the direction written on each sheet consistent with the contents of each drawing. We believe that the date written in the last sheet indicates the completion of the sketches. The eight sketches were completed one month after the earthquake. The other version in the Edo-Tokyo Museum collection is considered to have been created based on the above, with the intention of publishing after a few years. They sorted sketches in anti-clockwise direction, added not only some texts, but also slightly gorgeous adaptations in the depiction of flames and some famous architectural structures, intending to sell it to residents outside of Edo city. The comparison of these sketches, which are non-literary historical documents, with our detailed map of the burned areas, is enabled reconstruction of the earthquake fires in the early modern period.

## §1. はじめに

安政江戸地震は安政二年十月二日(1855年11月11日)夜四時(21:21)過ぎに発生した。震源は東京湾北東部、地震の規模はM7であった。江戸および東京を襲った直下の地震としては、最大の被害を与えた[e.g. 中村・松浦(2011, 2013)]。7,000人を越す死者を出し、地震の後には火災も発生した。火災による焼失面積は1.5km<sup>2</sup>[中村・他(2005)]と密集都市としては軽微で済んだ例となる。地震当日の気象は、午前小雨、午後には止んで夜はわずかに風が吹いていた。幕末初冬の夜更けということから、暖房と照明が必要な時間帯に発生した地震であった。

この地震後の江戸市中での火災に関しては、内神田稚子町の町名主齋藤月岑によって編纂されたと考えられている、火災状況を神田から眺めた様子を表した絵図が二系統現存している。一つは既に丹野(2008)および丹野・高山(2008)で紹介され、現在は江戸東京博物館に所蔵されている『安政見聞誌』という

タイトルの和綴じ冊子に含まれているものである(以下では**江戸博版**と略す)。この冊子は、彩色写生画に加えて、色々な人からの情報を編纂した地震記事や載せた文章編、北町奉行所の作成した出火見分調査結果の絵図を写した『安政地震焼失図』の3部分から成る。焼失図を除いた部分は『安政乙卯武江地動之記』(通称は武江地動之記)として刊行された齋藤月岑の著作本と似ている。丹野・高山(2008)は**江戸博版**の齋藤月岑の蔵書印や落款部分が手書きの模写であることから、齋藤月岑以外の誰かが齋藤家所蔵の武江地動之記の元帳様のものを写したと考えているが、写本作成者や作成時期などは不明である。

もう一系統は、東京都立図書館蔵の『安政乙卯武江地動之記』(別名:東都地震記:以下では別名と所蔵双方を反映して**東都版**と略す)の末尾にある彩色写生画である。『武江地動之記』は刊行されてその写本なども多かったと推察され、それぞれの底本は不

\* 〒101-0064 千代田区神田猿楽町1-5-18 電子メール:matsuura@adep.or.jp

† 〒285-0038 千葉県佐倉市弥勒町230-7

詳であるが、近代以降も江戸叢書版[斎藤(1917)]や三一書房版[斎藤(1970)]に写生画もモノクロながら収録刊行されてきた。

今回中村・他(2023)で作成した安政江戸地震の火災焼失域(図 1)を出火点と付き合わせる作業の過程で、丹野らでは後考を待つとされた**江戸博版**の由来等を考える上で役立つことに気がついた。また中村・他(2023)で判明した出火点付きの焼失域図と見比べることで、写生画が描かれた地点を斎藤家付近としてよいこと、焼失域の広さと火災の描かれた地域との対応などがよいことも判明した。そこでここに、斎藤月岑著として刊行された『安政乙卯武江地動之記』の、ある時点での著者控えと我々が考える**東都版**と、誰かが後日に刊行を目論んで作成した、と考える『安政乙卯武江地動之記』の亜種である**江戸博版**とを、従来重視されてこなかった写生画の部分で比較する。さらに、中村・他(2023)による、現代地図上に再現された、出火点付き焼失域と斎藤月岑の居宅との位置関係、写生画中の各火口の描写、写生画中の詞書き、を対比して検討することで、火災の時間的推移や、異なる版の写生画の差異やその原因に関して、気付いた点を取りまとめることにした。

尚、今回取り扱う**江戸博版**とは全く別に、一勇齋國芳らの挿絵入り刊行本、別名「万歳楽安政見聞誌」[注:三巻揃いで、例えば東洋文庫、早稲田大学、国会図書館など複数の所で所蔵されている]という史料がある。これは安政江戸地震の様子を伝える大衆向け刊行本で、災害の様子として、特に珍奇や稀な事例を煽情的に描写しており、現代で言えば所謂写真週刊誌の「安政江戸地震特集号」の位置づけとなる。出版元は販売数を伸ばす方向に関心が強く、誇張に躊躇が感じられない。従って災害時の社会を映す貴重な史料ではあるが、地震災害の有様から科学的に実際に発生していた事象を分析する作業には不向きな史料である。幕府によって出版がすぐに禁止されたが、禁止されるほど人気があったということであり、現存部数も多い。『安政見聞誌』という書名で今日でも一般に知られ閲覧も容易い。今回取り扱う江戸東京博物館蔵の物は、これとは全く別書であり、他所での所蔵は知られていない。斎藤月岑が原著者である一連の実見や聞き書き調査による安政江戸地震の様子を後世に伝える史料は、作成姿勢が『安政見聞誌』とは全く違うので、混同しないように留意願いたい。

**江戸博版**のタイトルは表紙に直書きされているが、前に貼ってあった題名の紙が剥離した後に付け足された可能性が指摘されている[丹野・高山(2008)]。我々は有名な『安政見聞誌』と混同されて売ってしまうことを目論んだ、後代の古物商なり前の所有者なりが加筆した、後代タイトルの可能性を指摘したい。

## §2. 東都版と江戸博版の絵図の比較

我々はまず、**東都版**の彩色写生画が、元々は横長の紙に見開きで描かれたものが、現在では半分に折られて和綴じされた状態である、という考えに立って、背中合わせの頁の画像を、絵を描いたと思しき状態に戻してみた。さらに反時計回りの方位順に並べた(付図 1~8)。案の定、折り目を挟んで両側の絵はよく繋がる。また、8枚の横長図それぞれに一つずつ、写生した場所からの方位の記述が、一貫性をもって無理なく配置された状態になる。和綴じされた状態の見開きで図をみるよりも自然な繋がり、例えば付図 2 の右側上部に左の上野町の火炎が薄く延びている様などからも明白である。

このように描画時の見開き状態で各図を考えれば、最後の南東方向の左側の余白に描かれた日付は、これら 8 図を一揃い作り終えた日付、と考えるべきではないだろうか。これに斎藤月岑の正当な蔵書印である「白雪堂」が押されているのも、この**東都版**に綴じ込まれている彩色写生画が斎藤月岑にとって大事なものだだった証拠と考える。従来この日付の斎藤月岑の日記などに『武江地動之記』を書き終えた様子がない、などと論じられてきたが、写生画部分のみの一枚完了の日付であるならば、十分妥当な日付となる。

以上から、**東都版**の安政江戸地震の火災の彩色写生画は、もともと東方向など 8 方向に分けて、8 枚の横長の図として作成されていたことは間違いない。但し、**東都版**の綴じ順は、東方向、北方向、次には両図の間の北東方向、と並び、さらに西方向から反時計回りに南西、南と描いた後、火炎が見られなかった北西方向、最後に南東方向となっている。この順番は彩色画の完成順の可能性があり、斎藤月岑の関心の高かった方向順であったかもしれない。

図 1 には付図 1~8 それぞれの図の範囲を、斎藤月岑の自宅(図中の赤星)を起点とした線で示した。図 1 を見れば、**東都版**彩色写生画は、概ね斎藤月岑が地震当夜に自宅辺りから八方の地震後の火災の様子を観察した状態の写生画であることが確認できる。但し各図は方向として決して等分に配置されておらず、火炎として描者が地震当夜のある時間帯にそれぞれ感じたくり毎に一枚の画になっている。

一方、**江戸博版**の写生画(付図 9~16:江戸東京博物館蔵を中村撮影の写真より作成。より大きな図は丹野・高山(2008)にある)は、東方向から反時計回りの方位順に綺麗に並んでおり、付図 1~8 に並べた状態と同等となっている。但し元の横長図の状態ではなく、絵図は付図 1~8 の原画状態からみれば、和綴じの見開き左側から始まり、最後の南東方向が見開き左側で終わっている。火災状況は**東都版**の絵図を写したものであるが、後述のように若干手が加えられ、本来は別図だった部分まで隣頁の火炎の上方が加筆されている。

最も目を引くのは、江戸博版には絵図の見開きに黒い外枠線となる長方形が引かれていることだ。つまり写生画原本の複製ではなく、東都版のような和綴じ状態で写している。但し方位は並べ替えてある。また、詞書き部分が、東都版よりも少し多い[東都版は本論の付録、江戸博版は丹野・高山(2008)にそれぞれの文字部分の翻刻がある]。菊屋橋、二番原、飯田町と目安となる地名がいくつか書き足されただけでなく、地震の日付に、「十月二日」と東都版には欠けている月を加えてある。また、神田社や火炎の描き方がより凝っており、全体にカラフルな描写となっている。さらに北方向の図(東都版では付図 3 にあたる)では神田明神と湯島聖堂との間隔を広げて酒井侯の屋敷を加筆してある。方向の詞書きの位置などを調整していないことは、綴じられた状態ではない絵を知らない者が複写した証拠に思われる。

表 1. 付図 1-8 に描かれた火口  
Table 1. Fires in Fig. A1-A8.

付図	記号	火口	付図	記号	火口
1	a	深川	5	k	礪川(小石川)
	b	本所(図中右手)		l	小川町
	c	本所(図中左手)		m	小川町(左奥)
	d	中之郷	6	n	大手前辰の口等
e	浅草三好町	(o)		柴井町	
2	f	吉原田町猿若町等	7	p	日比谷
	(g)	小塚原		q	京橋
	h	上野町		r	築地
	i	坂本		s	霊巖島
3	j	下谷茅町			

(記号)は同方向の火口に重なっているもの  
eとfは図で一連に見える。

これらの違いからは、江戸博版の写生画は、出版を前提として東都版或いはそれに近い斎藤家所蔵の元の写生画を和綴じした状態を底本としながら、火炎などの描写を豪華にして、図の順番を方位順に並べるなど整理して写したもの、と考えてよかろう。一方東都版の写生画は、絵の中身がそもそも地震当夜に走り書きで描かれたであろう下書きを、一ヶ月ほどで彩色写生画として完成させた斎藤家用の控えの一冊、という位置づけが相応しい。観察地点は当然斎藤家近辺が妥当である。

### §3. 東都版の写生画と焼失域との対比

図 1 には表 1 の 19 火口に対応する焼失域を記号で示した。記号に()のついた火口は、観察地点にとつ

て手前となる別の火口に重なって独立には描画されていないが、文章で言及されているものである。付図 2 の方向で上野町 h と坂本 i が写生画のように斎藤家の位置から離れて見えるとは思えない。燃え始めには分離して見えたのか、両火災との距離の差によって画のような心象として見えて描かれたのだろうか。三好町 e と吉原等 f とは距離差も h と i の距離差と比較して小さいためか、繋がった火口として描かれている。小塚原(g)の火は手前の上野町 h に隠されると思われるが、h の類焼が広がる前までは、写生画では表現しきれていない遠近差によって、遠方にも火口があることが判って居たのかもしれない。

付図 5 でもほぼ同方向に見えるはずの小石川 k と小川町 l とは、分離して描かれている。この場合は、k の火事は、小川町で広範囲の焼失が生じた火災が燃えさかる前に、一早く燃え上がって目立って見えたことを示しているのだろう。実際小石川は狭い焼失域に留めて早期鎮火に成功した場所である。この様に、図 1 と付図 1~8 の詞書きを対照すれば、火災の時間的推移の情報も推定できる場合がある。

付図 8 の範囲は他図の半分であり、そもそも狭いが、本来は方角として付図 8 の霊巖島 s と付図 1 の深川 a とは区別困難なはずである。しかし別図に描かれていることは、両者が斎藤家から火口として見えるのに時間差があったと考えられる。詞書きの崩し字は、どちらが先に燃え上がったか、二通りの解釈が可能である。江戸博版に倣って付図 8 の崩し字を「遅く」と読めば、小石川とは逆に、より遠方の深川 a は出火点が多数あり先に大きい火口として見え、後から手前に霊巖島 s の火口が見えるようになった、という燃え方を示唆する。「速く」と読めばその逆になる。付図 8 も後から描き足された様な順番に綴じられているので、地震当夜はまず斎藤家から見て目を引いた付図 1 の方向で見えた火口を描いていて、時間が異なる s の火災は別図に収まった可能性がある。

付図 5 小川町の火口が l と m と二つに分けて描写されている。中村・他(2023)では出火点判っていないお堀よりの小川町の焼失域 m が、堀田屋敷などが出火点とされる広い焼失域 l とは別に燃え上がっていたことになる。やはり領域 m には未だ特定できてはいないものの、火元が別にあったことが判る。

このように、写生画を焼失域と照合しながら眺めると、時間的、空間的な火災の経過の情報を再現できて、近世の地震火災を、四次元的にある程度把握する助けになることが判った。また、これらの写生画は、ほぼ地震当夜に斎藤家の近辺の位置から見た状況を、多少の心理的な拡張や縮小もあるものの、概ね観察できた状況の写しとして描かれていたと判断できる。

尚、付図 4 は低地の斎藤家から夜間には描き難いはずの方向である。火口もないので、東都版の綴じ

順からも、地震当夜には描かず、後日全ての方向を網羅させる意味で追加された画である可能性が高い。そのために綴順も後になっていると考える。

#### §4. おわりに

付図 1～8 のように横長に描いた状態で写生画を見ると、描いた人の見たものがより良く判ることが示された。今回このような作業によって、**東都版**の写生画の完成は地震後一ヶ月ほどであったと最後の頁の日付からも推定される。また、**東都版**は斎藤家の控え的なものである一方で、**江戸博版**は刊行を目指した大衆向けの加筆があり、刊行予定の見本校の版であると推測される。

図 1 の焼失範囲の分布を見ながら、各方向の付図を見ることは、斎藤月岑の描いた『東都地震記』の「彩色写生画」と、北町奉行所の作成した「出火見分絵図」などの平面的な火災情報とを三次元的に対比することになる。これによって、安政江戸地震の火災を空間・時間的推移まで含んで実感できるだろう。焼失域平面図の示す火災の大きさを「彩色写生画」の火口の勢いから確認することも可能である。

雉子町から見えて描写できた火口(火柱)は 17 ヶ所であった。さらに方向が重なりあった 2 ヶ所にも言及されている。斎藤月岑は、さらに地震当夜は手前の大きな火炎に隠されたりして全く確認できていなかった火災を、後日の踏査や聞き取りなどによってさらに探究して、江戸市中の火口は三十数ヶ所、という数字を出している。図 1 に示された焼失域を大きく数えれば、「火口」として斎藤月岑は妥当な数を得ていたことが判る。

斎藤月岑の地震直後からの熱心な記録と後日の調査とのお蔭で、地震後の火災の時間的な推移も多少知ることができるという点で、今回比較した二系統の彩色写生画は大変貴重な非文字史料である。今後近世史料の種々の版を検討する場合には、図の状態も考慮すると、史料の成立順や成立経緯などの決定に寄与する点もあるのではないだろうか。また、絵図は綴じられる前の状態を考慮しながら取り扱うことも重要である。

#### 謝 辞

<https://archive.library.metro.tokyo.lg.jp/da/top> の東京都立図書館の東京アーカイブからダウンロードした**東都版**の縦長頁毎の画像から付図 1～8 は作成した。付図 9-16 には江戸東京博物館に撮影を許可して頂いた**江戸博版**の中村撮影の写真を使用した。東京大学史料編纂所の杉森玲子教授には斎藤月岑の別号(翟巢)および落款等について御教示頂いた。本稿は編集担当の平井敬氏と匿名の査読者 2 氏によって改善された。特に 1 名の査読者には、著者らのつたない翻刻の誤りを細かく訂正して頂いた。記して感謝いたします。本研究の一部は、地震調査研究推進本部の支援事業として文部科学省から委託されて実施された。

対象地震:1855 年安政江戸地震

#### 文 献

- 安政地震焼失図, 1985, 新収日本地震史料, 第五巻, 別巻 2-1, 233-264, 東京大学地震研究所。
- 丹野美子, 2008, 江戸町名主斎藤月岑の地震記編纂, 江戸東京博物館蔵『安政見聞誌』をめぐって, 東京都江戸東京博物館研究報告, **14**, 152-166, 江戸東京博物館。
- 丹野美子・高山慶子, 2008, 斎藤月岑編著『安政見聞誌』について, 東京都江戸東京博物館研究報告, **14**, 125-150, 江戸東京博物館。
- 中村操・茅野一郎・松浦律子, 2005, 安政江戸地震(1855)の江戸市中の焼失面積の推定, 歴史地震, **20**, 223-232。
- 中村操・松浦律子, 2011, 1855 年安政江戸地震の被害と詳細震度分布, 歴史地震, **26**, 33-64。
- 中村操・松浦律子, 2013, 安政江戸地震の被害と震源, 日本地震工学会誌, **20**, 2-7。
- 中村操・松浦律子・大邑潤三, 2023, 1855 年安政江戸地震の出火点詳細調査, 歴史地震, **38**, 149-166。
- 斎藤月岑, 1917, 安政乙卯武江地動之記, 巻の下, 江戸叢書巻の九, 江戸叢書刊行会, 62-65。
- 斎藤月岑, 1970, 安政乙卯武江地動之記, 日本庶民生活史料集成, 三一書房, 183-211。



図1. 彩色写生画の描画方向と実際の焼失域[中村・他(2023)]との位置関係  
 赤星が斎藤月岑の居宅位置. 線は付図1~8に描かれた方位範囲を示し, a~sは表1の火口.

Fig.1. Location of the burned areas [Nakamura et al.(2023)] and directions of eight colored sketches shown in Fig. A1~A8.

The red star is Gesshin's home. Solid lines indicate the directional range depicted in each sketch. Alphabets (a~s) indicate each burned area corresponding to 19 fire blazes in Table 1.

付録 付図 1~8 内の文章(都立図書館所蔵版写生画の詞書き)

Appendix Texts in Fig. A1-A8 (Words written in sketches of the Tokyo Metropolitan Library Collection).

付図一 ×(付図八の末尾と対応)

二日夜地震の後  
神田の地より  
四方を望むの図  
神田より看れハ  
三方みな火なり

東の方  
北風西少し交り  
火烟東南に被る

本所の火口々あり  
鍋町火之見

浅草見附  
始は微風なり后勢しく強く  
なりたりされと飛火ハ少しと  
見えたり 各別に燃出したる  
よしなり凡廿二口程に見え  
たりされと重りあひて見え  
しなり

中之郷  
柳原堤

付図二  
浅草三好町の火ハ  
三日昼四時頃に消たり

吉原田町猿若町  
等の火なり

浅草の火殊に  
熾(さかん)なり後にハ  
下谷長者町の  
火と重りて見え  
たり 筋違御門

小塚原の火もこの筋なるへし  
上野町の火

この火始ハさしもあらざりしか  
長者町迄次第に延焼に及びて  
夜明におよふまで焼たり

付図三  
土井侯火之見

坂本の火

上野  
下谷茅町の火

北  
神田社  
聖堂

付図四

駿河台  
亥子の間  
幸にして火更になし  
定火消櫓無事

乾の方  
小川町  
松平左衛門尉殿  
火の見

付図五  
礪川の火先に鎮りたり  
小川町火

西  
四ツ時大に震ひし後少しの地震ハ  
更に止む事なく故に家の傾かぬ  
輩迄各心安からず夜の明るまで  
寝たる人なし冬の夜ながら殊に  
長く覚えたり

付図六  
塵灰まで常さまの火事にまさり  
余計に立たり

御城

坤の方  
白き鳥いつもの如く  
空中にわたるを看たり

大手前辰の口等の火尤  
熾(さかん)なり次第に焼広こりて  
又数ヶ所の火重りて一ツの  
火の様に見えたり

神田橋  
御門  
此夜風すくなけれハ  
烟は空へ立昇りたり

付図七  
柴井町の火も此筋なり

南  
日比谷辺之火

京橋辺の火事  
この筋ハ烟を後ろ  
より見る

築地の火

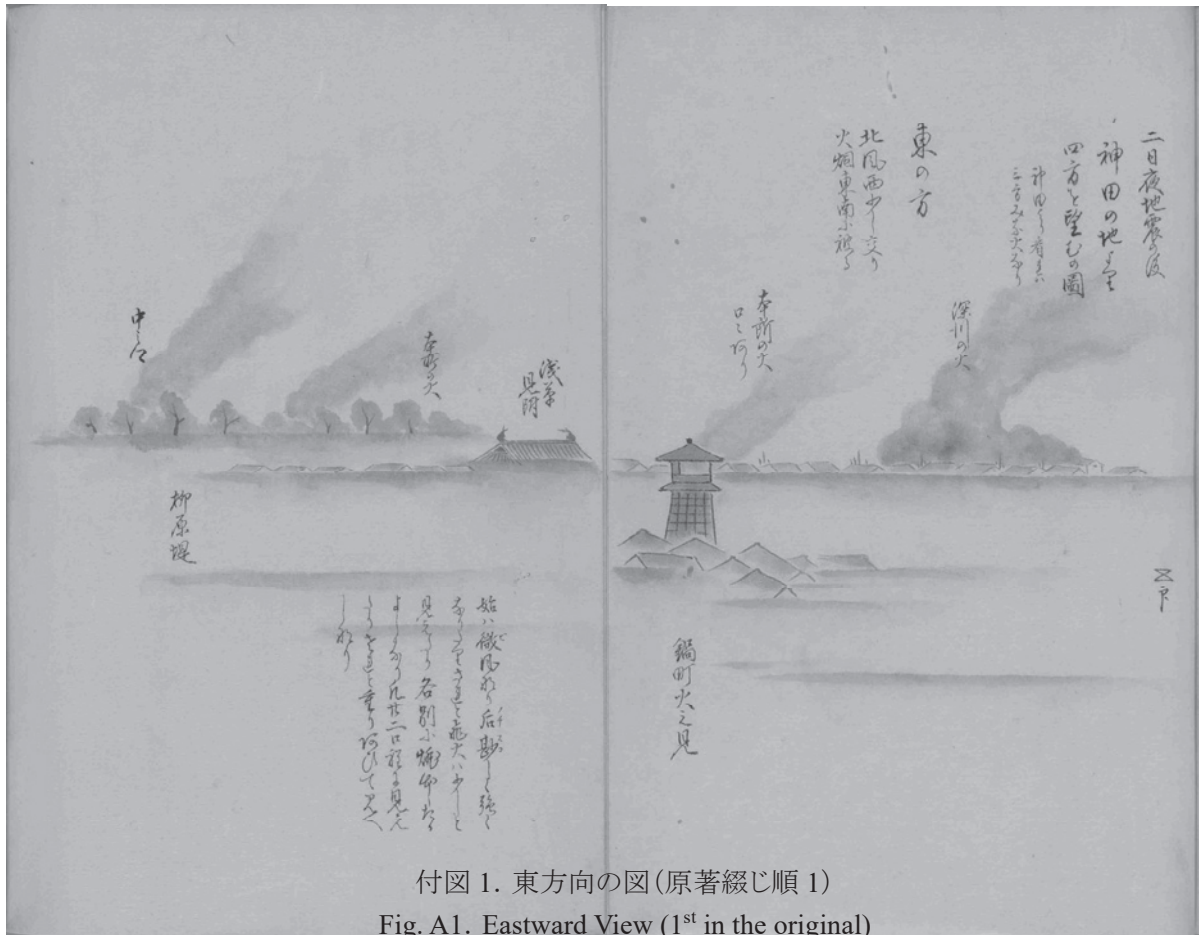
付図八  
霊巖島の火なり  
此辺ハ遅く(注) 燃立し  
と見ゆ

異の方  
X 始の印へつづく

安政乙卯霜月三日 一校畢

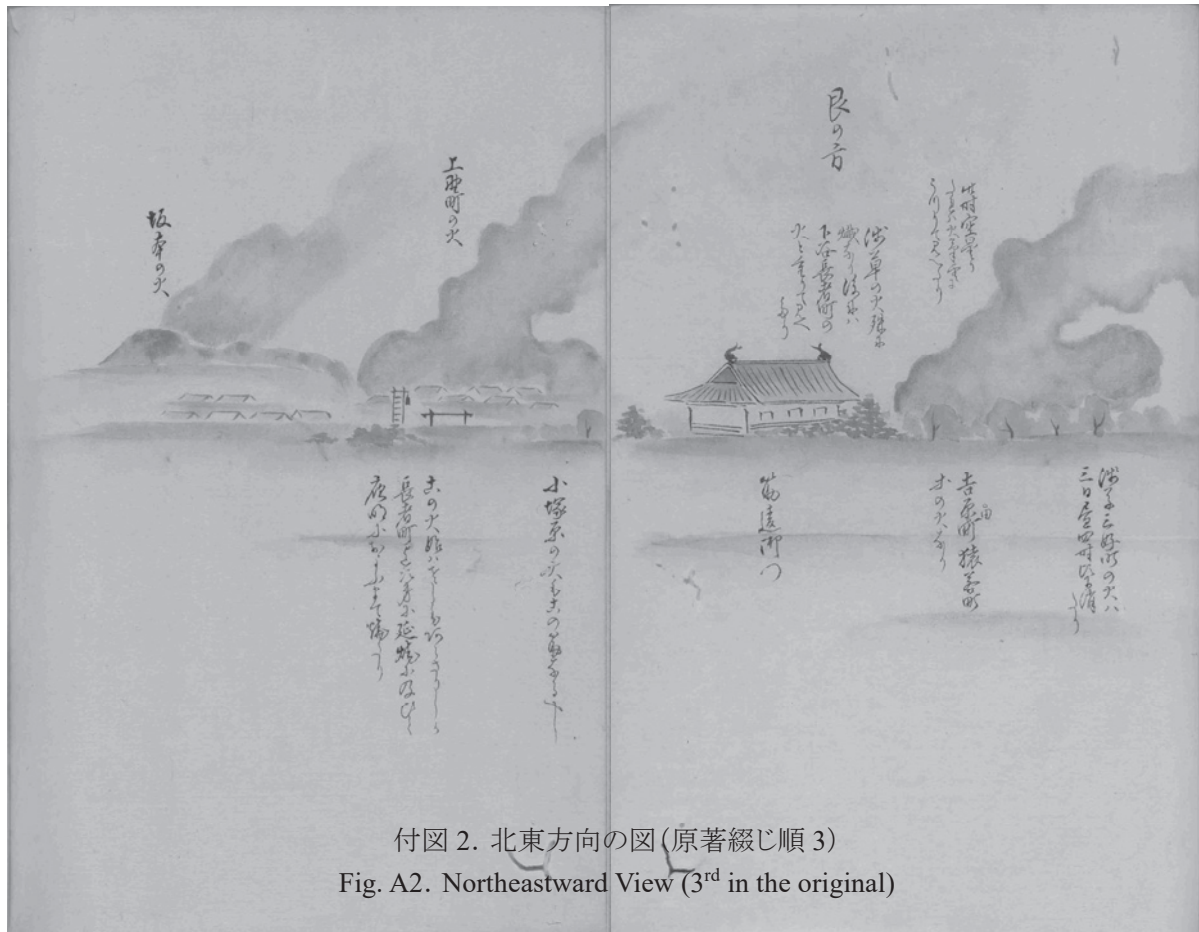
注:字色を変えてある末尾から4行目の「遅く」は、元の崩し字が、「速く」とも読み取れ、どちらとは断定できない。ここでは江戸博版の翻刻[丹野・高山(2008)]に倣って、一応「遅く」としておく。この場合霊巖島sの火災は深川aの火災より後から燃え上がったことになる。もし「速く」であればその逆で、深川aの火口の視界を遮らずに霊巖島sが早く燃え上がって収まったことになる。字だけからどちらかは断定はできないが、両所の火災にそれなりの時間差があったことだけは確実である。

受理後の加筆:武江地動記[e.g. 日本地震史料 p.575 下段5行目]に従えば霊巖島の火災は明け方に遅れて発生したので、写しは兎も角、元の字は「遅」であつたらう。



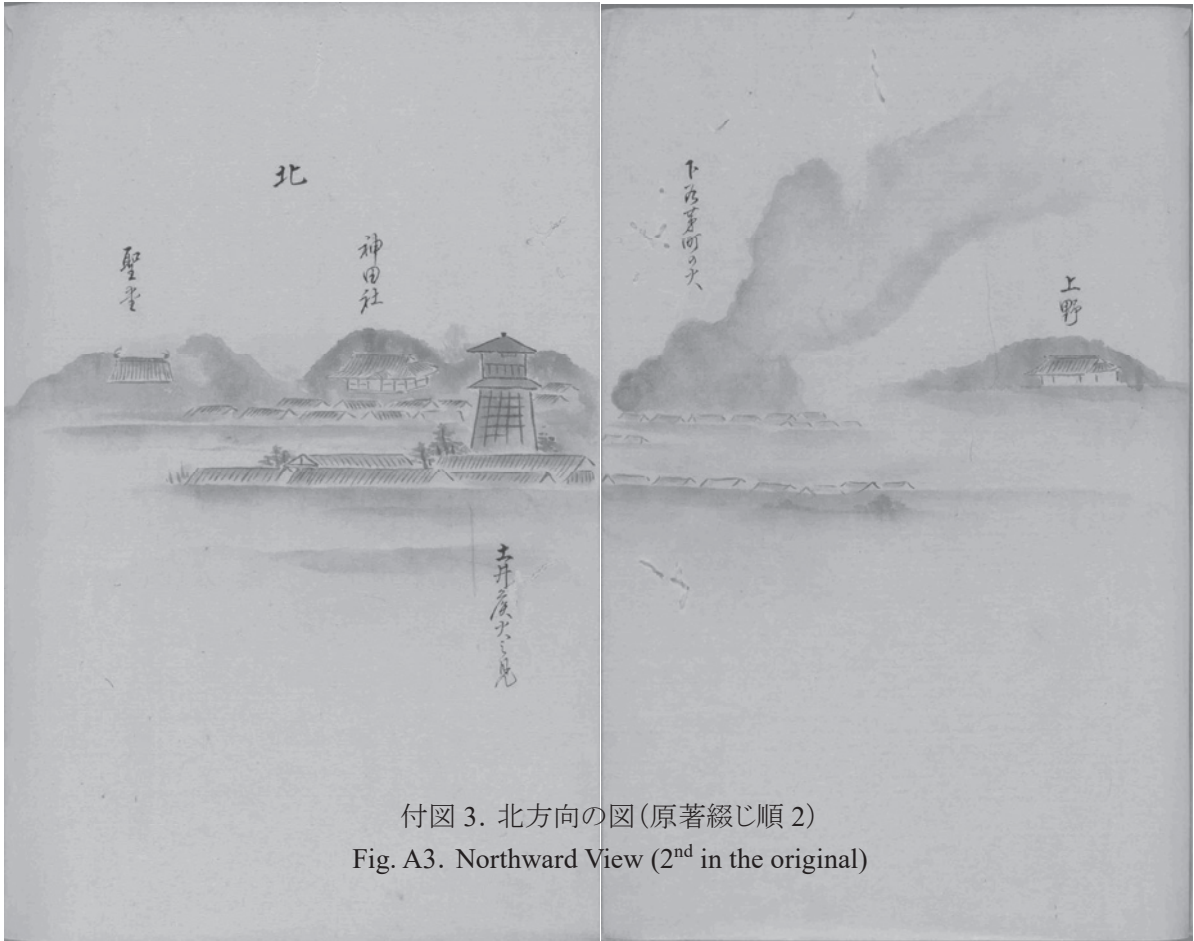
付図 1. 東方向の図(原著綴じ順 1)

Fig. A1. Eastward View (1<sup>st</sup> in the original)



付図 2. 北東方向の図(原著綴じ順 3)

Fig. A2. Northeastward View (3<sup>rd</sup> in the original)

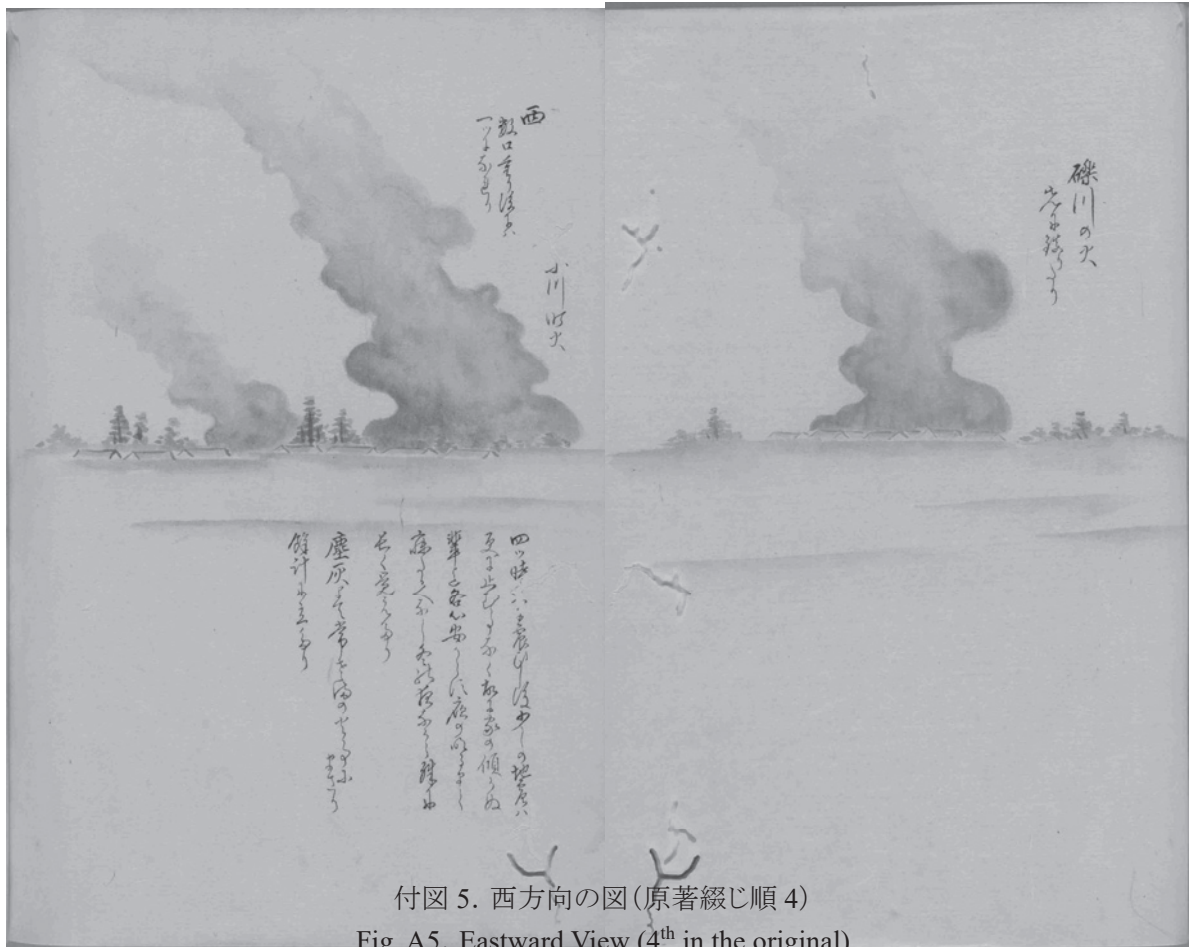


付図 3. 北方向の図(原著綴じ順 2)  
 Fig. A3. Northward View (2<sup>nd</sup> in the original)



付図 4. 北西方向の図(原著綴じ順 7)  
 Fig. A4. Northwestward View (7<sup>th</sup> in the original)

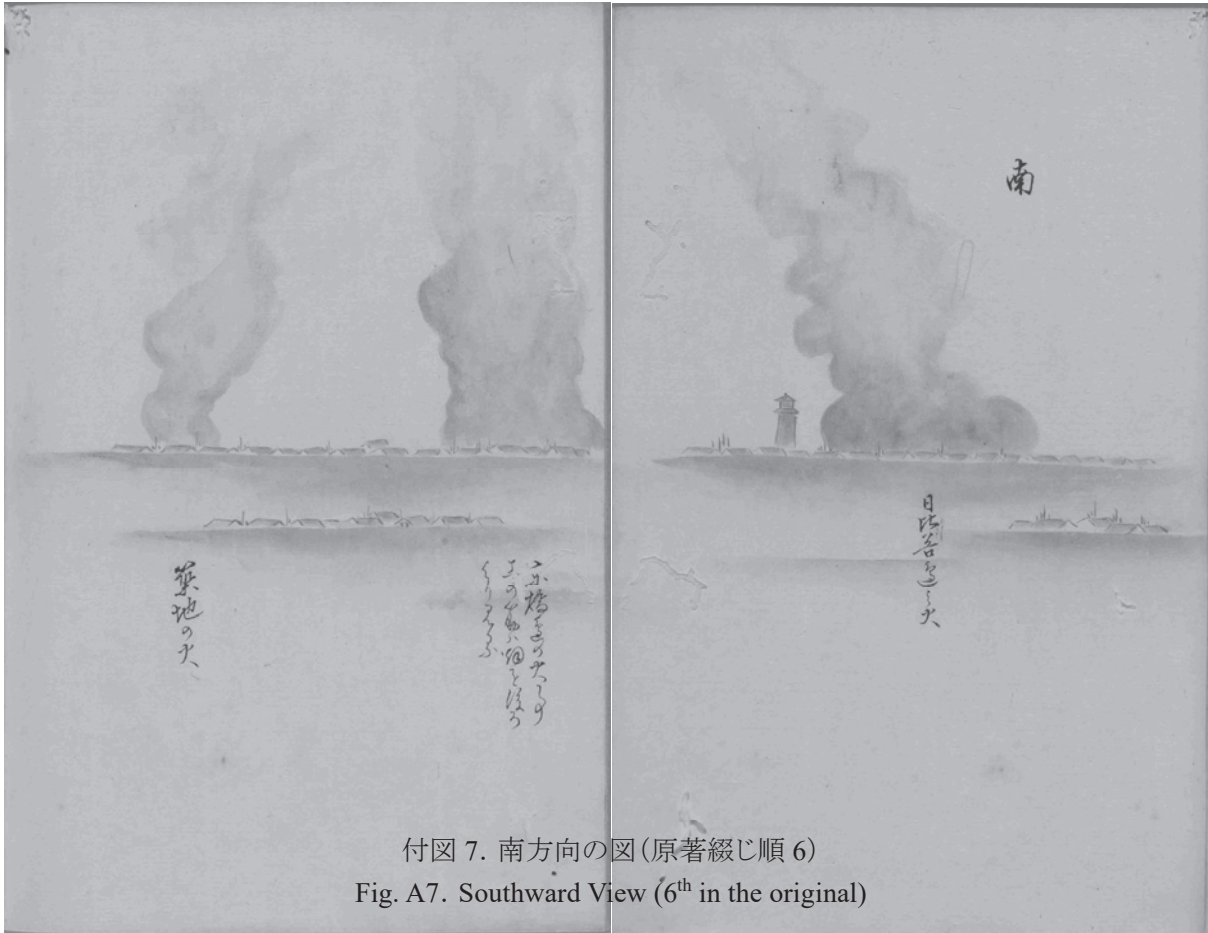




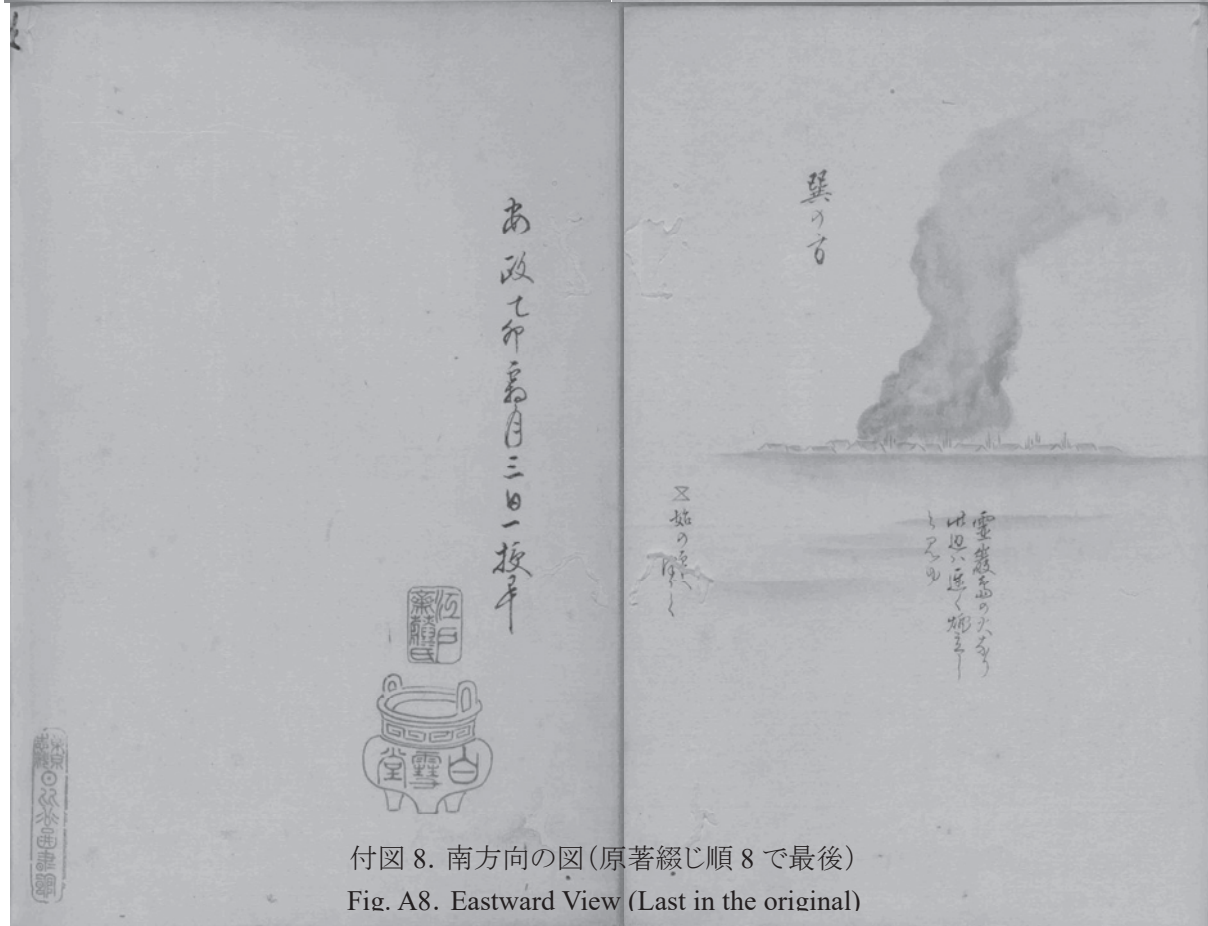
付図 5. 西方向の図(原著綴じ順 4)  
 Fig. A5. Eastward View (4<sup>th</sup> in the original)



付図 6. 南西方向の図(原著綴じ順 5)  
 Fig. A6. Southwestward View (5<sup>th</sup> in the original)

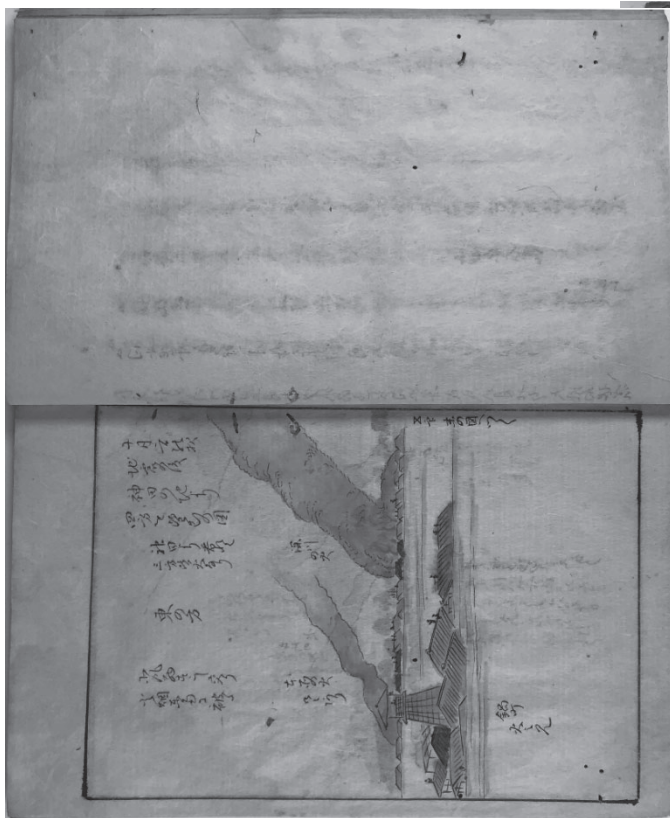


付図 7. 南方向の図(原著綴じ順 6)  
 Fig. A7. Southward View (6<sup>th</sup> in the original)

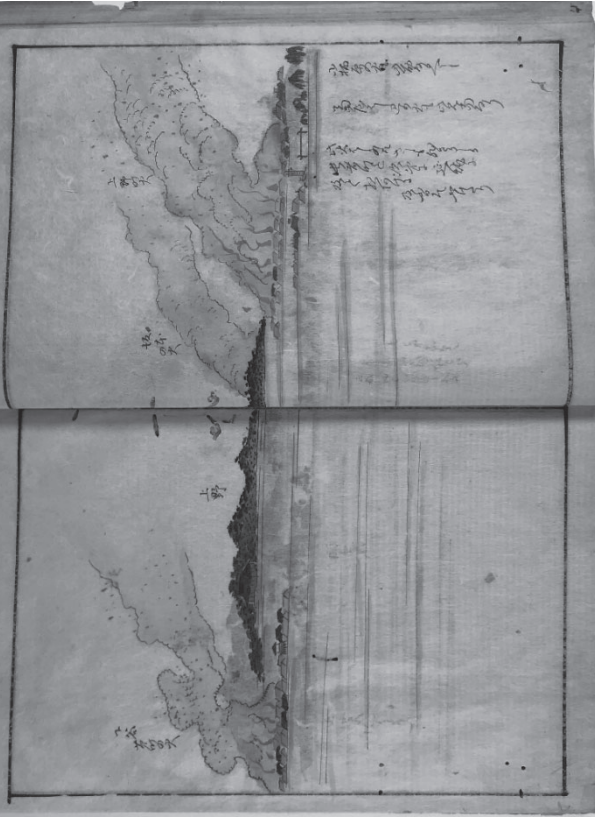


付図 8. 南方向の図(原著綴じ順 8 で最後)  
 Fig. A8. Eastward View (Last in the original)

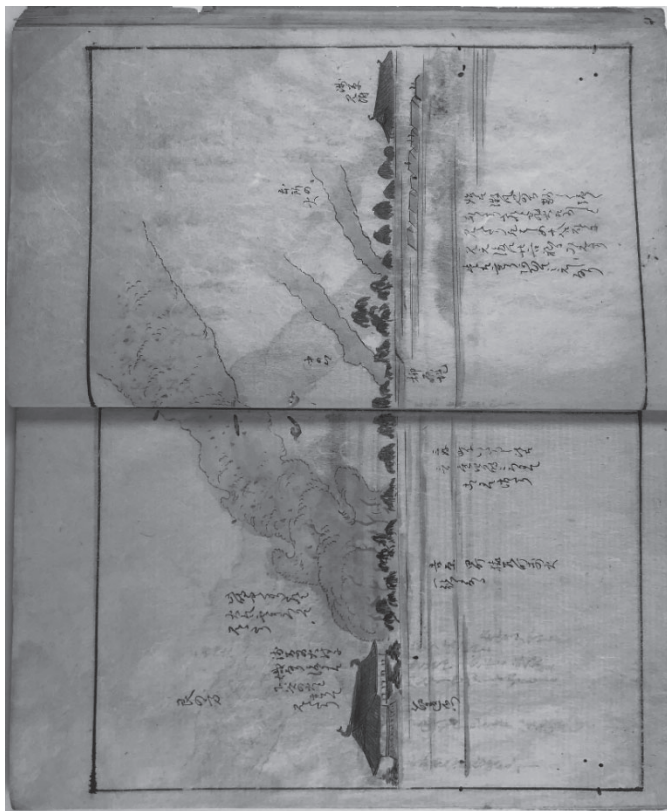
付図九 江戸博版の一番目の図



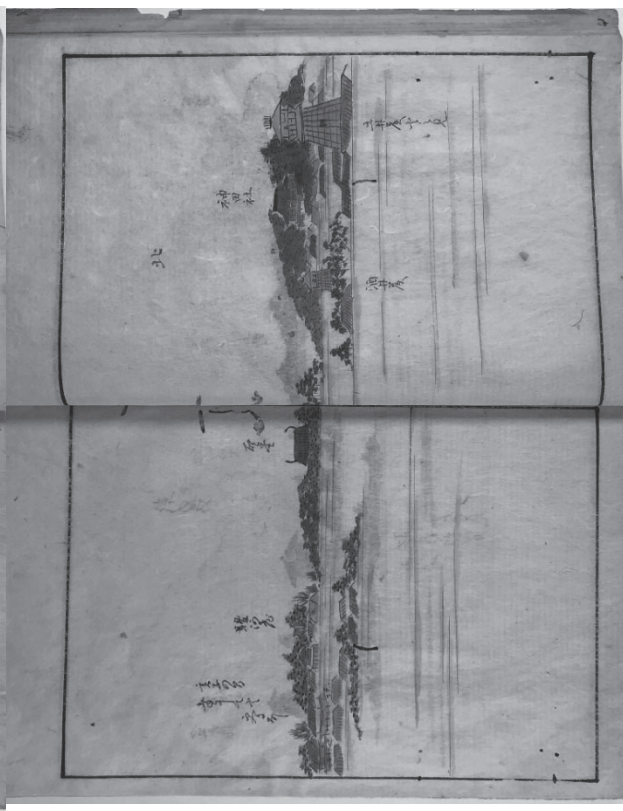
付図十一 江戸博版の三番目の図



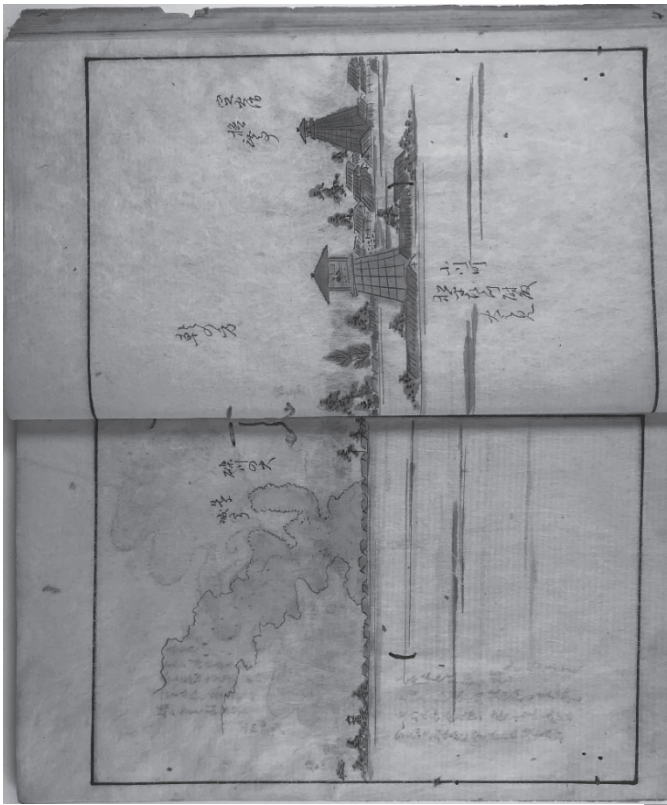
付図十 江戸博版の二番目の図



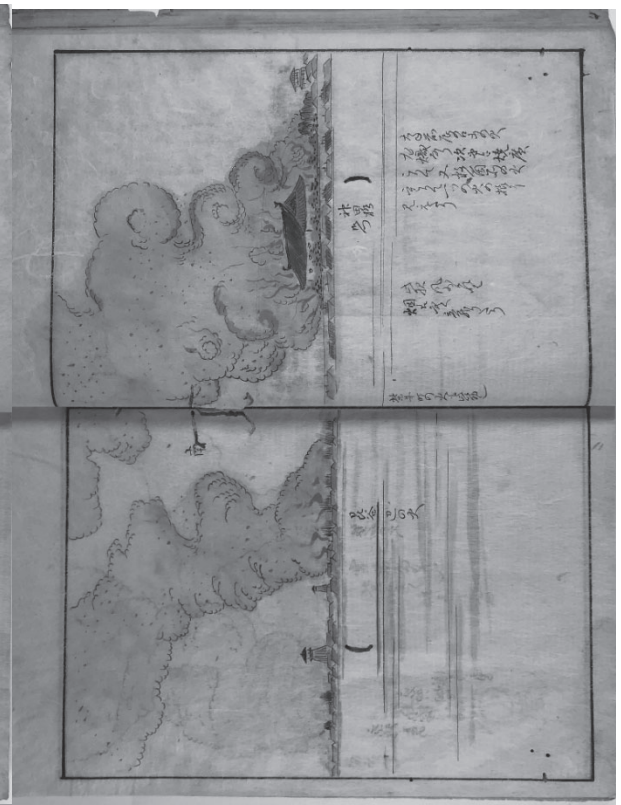
付図十二 江戸博版の四番目の図



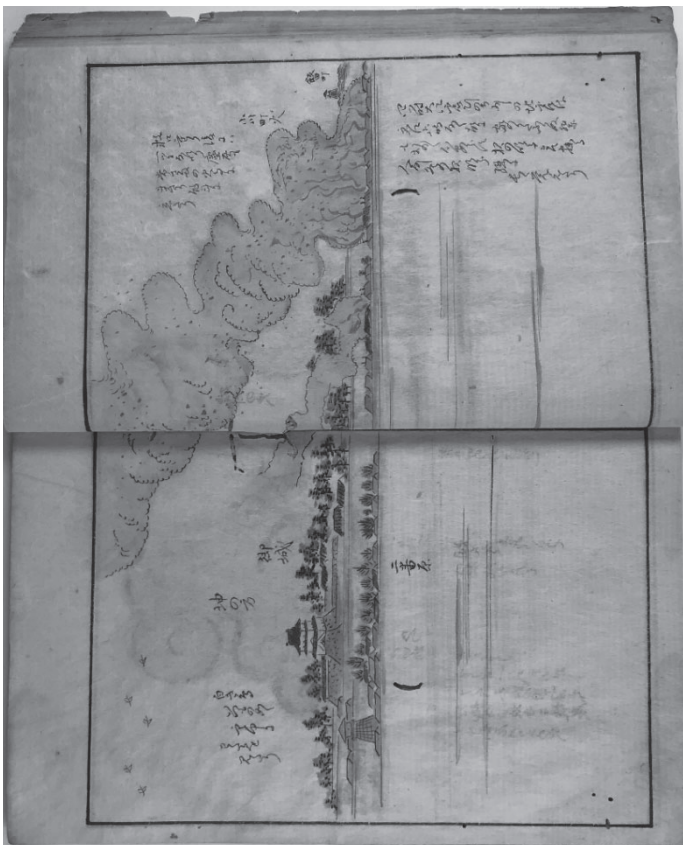
付図十三 江戸博版の五番目の図



付図十五 江戸博版の七番目の図



付図十四 江戸博版の六番目の図



付図十六 江戸博版の八番目の図

